

【中学生の部】 作文部門 最優秀賞

「今を知る、未来を創る」

横浜中学校 3年 まるやま こうすけ 丸山 耕輔

「2050年脱炭素社会の実現を目指すことを宣言します。」

菅総理大臣の所信表明のこのワンフレーズに僕の心は揺さぶられた。2050年、30年後の日本を動かしているのは、間違いなく今中高生である僕らの世代。日本のトップリーダーが、自分たちに大きな期待と使命を託してくれている気がした。

僕が環境問題に興味を持つきっかけとなったのは、小学校の頃伯母が言った一言、「大多数の人の無関心が地球を滅ぼすの。」

である。彼女は住んでいる市で雑木林を伐採し都道を整備する工事について住民投票が行われたが、住民過半数の投票を超えず開票すらされず不成立となった。結果はどうなっていたか分からない。しかし、彼女が最も悔しがっていたのは、そこに住む人が身近な自然保護についての論議にさえ参加しない実情だった。自然を守りたいと思う気持ちがどんなに強くても、大勢で声を上げていかなければ願いは届かないという事実が幼い頃の僕の記憶に刻まれた。

2020年7月1日、レジ袋の有料化が日本全国で一斉スタート。環境のため1人ひとりのライフスタイルに変革を促すことが目的と政府の公式サイトで知った。施行から1年、レジ袋を辞退する人は明らかに増えている。しかし、僕が疑問に思うのは、精算時いつも「レジ袋はいかがいたしますか。」と尋ねられること。「お金を払えば袋に入れますけど。」と言われている気がしてならない。もらう・もらわないの選択制ではなく、購入時のレジ袋使用禁止でいいのではないか。反対意見も多いだろう。では、なぜ反対する人がいるのか。それはその人の社会的価値観、「常識」から生じてくる意見であろう。そしてこの常識こそが、これからの環境問題を解決するキーとなると僕は思う。

日本では家に入る時靴を脱ぐ。物を食べる時箸を使う。これは幼い頃からそうするように育てられた当たり前の常識でやっている行為だ。この当たり前感覚を環境問題に取り込んで、特別なことではない常識と認識される社会を作りたい。大多数の人の関心が地球の命を救うのだから。

そんな社会の実現のため、最も重要となってくるのは、幼少期からの環境教育だと僕は思う。自分が環境教育を十分に受けてこなかったからというわけではない。理科や社会、総合学習の一単元として環境問題は扱われていた。しかし、これからは各分野を統合し、「環境」という科目で授業を行って欲しい。なぜなら、色々な科目の中で教わってはいたが、これがこの間のあれとどうつながってどういう影響が出ているのか理解しづらかった(実感できなかった)からだ。今地球がどんな状態にあるか教科の枠を外して教育し、その内容について生徒同士が話し合い、自ら行動を起こす授業を小学校入学時から長期的に行う。課外授業も多く取り入れていく。例えば、現状有志を募ってやっているような植林支援、ビーチクリーンなどの環境保全活動に参加し、活動直後に自分たちの今回行ったことが環境にどんな影響を及ぼしたのか活動の指導者から教えてもらう。そんな授業

内容を目指すのだ。幼少期にこの教育を受けた子供たちには、未来に必要な環境についての常識が無意識に培われていくはずだ。20年、30年先には彼らから地球環境を守ろうと大多数の声が上がリ、それが推進力となり社会全体を動かしていくだろう。

僕らの親世代以上の人たちが懸命に働いて日本を世界有数の経済大国へと押し上げてくれた。経済を発展させることを最優先とし、化石燃料を使い生産を続けた。人々の生活は豊かになり、便利な使い捨てが日常となった。当時でも地球の変化を敏感に感じ取り、警鐘を鳴らしていた人はいたはずだ。しかし、豊かさに慣れきった大衆は、少数意見と聞き流したのかもしれない。慣れ親しんできた生活を急に変えろと言われても反発があるだろう。ならば、環境常識を備えた僕ら世代が今度は日本を環境大国へ押し上げていこう。先人のおかげで、生まれた時からずっと何一つ不自由のない生活をしてこられた。今度は僕らが後人のため新しい価値観で社会を変革し、不自由のない生活を創出、継承しなくてはならない。

地球温暖化は、世界中の動物や植物、生き物すべてに関わる問題だ。温暖化の主な原因は「人間活動」である。疑いの余地はない。人間が地球上で生物界の頂点に君臨し続ける以上、生物すべての生命活動に責任を負うのは当然だ。ましてや人間が引き起こした地球の危機なのだから。

化石燃料の使用をやめる道を選ぶか、あるいは今まで通りの経済重視の道を進むか。どちらの道を選ぶかで二十二世紀の地球の姿は大きく変わってくる。どんな未来になるかは、今を生きている人間次第なのだ。